

# らい 来ぶらり 12

明治6年5月、井上馨とその部下であった渋沢栄一は、政府首脳に財政危機を訴えたが、受け入れられなかったので辞職することになった。そのさい建白した「財政改革に関する奏議」を新聞に発表してしまった。結果として、政府の秘事を暴露したわけで、それが新聞統制への原因の一端となったことは確かであろう。建白書提出前に渋沢が井上馨にあてた書簡によれば、この新聞掲載は渋沢の発意によるように読める。しかし、35年ほど後の回顧談で、渋沢栄一は、「あれこそ井上さんが悪い。そんな事をしては叱られるといけなからと言って留めなければいけない」と発言している。

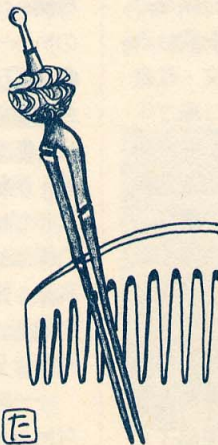
このところ、明治初期が面白くて、新聞や図書の出版について、その周辺を少しずつ復習している。時間の流れの中で、年表的な事項として、「昔」に属することが確かな「事実」でも、それらひとつひとつが持っている問題や、他の事柄との関係は、意外と今日的な問題でもあることに、今さらのように驚いている。けれど、わずか100年足らずに過ぎない年月が、事実の受け取り方や経験の語り方を、ずい分変えてしまうものだというのも、強く感じている。それが個人の感情に属することになると、それは初恋の思い出にも似て、美しく彩られる。

新聞紙上に「下町」という文字を見かけることが多くなった。地域文化の再発見とか、コミュニティの発想

## 年月の贈りもの

事務長

佐野 眞



であるが、そこで語られる「下町」がどうも胡散臭いのである。その「下町」は、「遠きにありて思うもの」になっていて、きまったように「人情」がくっついている。

隣家とほとんどすき間なく建っている木造家屋、時には壁1枚の長屋では、どうしても隣人の生活の音や声が聞こえてくる。眼にも飛び込んでくる。それが日常であればあるほど、それらを聞かなかったこと、見なかったことにする「思いやり」がなければ暮らせない。子供たちは家にも外にも遊び場などないから、道路でさわいなり職人さんの仕事の邪魔をする。危険がいっぱいだから、大人たちは自分の子・他人の子を区別なくどなる。そうした、やる瀬ないような暮らしも、そこから離れ、時間が経つと、美しくも人情味あふれる「下町」に変貌する。現在そこに住んでいる人が語ったら、その中味は括弧つきの「下町」とはずいぶん違うはずである。

沢村貞子さんは渋谷あたりに住んでいて、ずい分昔のことだから、あんなに美しく浅草を語るができるのだろうか。私にも、美しい新富町や木挽町を話すことができる。それは時間が私にくれた贈りものであり、年月はいろんな出来事を、私用にきれいに塗りかえてくれている。けれども、ほんとうはどうだったのだろうか。そう言う視線を忘れてしまうと、何もかも自分用の色でしか見えてこない。

## 雑誌記事を探すのにも コツがある。

「雑誌記事を探す」といっても、多くの場合は、記事の原文に出会うまでにいろいろな手順をふまなければなりません。その手助けをしてくれるのが「索引」とか「目録」といったツールです。

●**索引を探す** 求める記事の掲載誌名がわかっている場合、その雑誌についての総索引・総目次があれば役に立ちます。たとえば、『国語と国文学』臨時増刊の分類総目次、『中央公論総目次』のように、独立刊行されたもの、あるいは、ある号の一部に載っているものなど。それがなければ、1巻ごとにつけられる通巻目次・索引でも役に立ちます。これは、当該巻の最終号か次巻の初号についていることが多く、当館では、製本時にそれらを巻頭に持ってくるか、または巻頭に掲載号を示すかします。どの雑誌に総目録・総索引があるのかを知るためには、『国立国会図書館所蔵和雑誌目録』巻末の「雑誌総目次一覧」や『雑誌総目次索引集覧』（日本古書通信社）が便利です。

●**雑誌記事索引** 掲載誌名・巻号がわからない記事、ある人物が書いた記事、ある主題についての記事を探す場合の有効なツールに、雑誌記事索引があります。なかでも、国立国会図書館編集の『雑誌記事索引』は、国会図書館が受け入れた学術雑誌・紀要類の記事を、独自の分類法で収録していて、広い分野にわたって記事を探せる最も一般的な索引誌です。現在は、「人文・社会編」「科学技術編」「医学・薬学編」の3編が年4回発行されています。「人文・社会編」は、1948年から発行され、現在は年間1,800誌ほどを対象にしています。巻末に著者索引を付しています。さらに、11の主題別、著者名・件名の総合索引を付した累積索引版（1946-64、1965-74、1975-79）が作られていますので、探しやすくなりました。ただし、収載されていない雑誌も数多くありますので、他の索引誌や文献目録から探すことも必要です。（雑誌係 工藤晶子）

## 記事はわかったけれど 所蔵館がわからない。

掲載誌はわかったけれど、さて所蔵館は？ 当然ながら、まず当館の目録カードで探します。和雑誌なら「和漢書著者・書名目録」で、洋雑誌なら「洋書著者名目録」でそれぞれ雑誌名からひくことができます（和雑誌については、今年度中に、冊子体の『学習院大学逐次刊行物目録 和文編』を刊行する予定）。学内で所蔵されていないと判明したら、次の2つの目録にあたることをおすすめします。

●**学術雑誌総合目録** 誌名順に、所蔵館と所蔵巻号が通覧できます。和文・欧文の2分編で、それぞれ人文・社会科学と自然科学の分冊体です。所蔵館の8～9割は大学関係です。

和文編は中国語・朝鮮語誌を含み（国立国会図書館は省略）、配列は誌名の訓令式アルファベット順です。ただし、最新版の刊行後10年以上経ているため、内容の再確認を要する場合があります。

欧文編は、補遺版も含めて1980年現在のデータです。誌名の記載で、欧文・自然科学編は他の3編と異なる点があります。それは、誌名が変わっても巻号が継承されている場合には、最新誌名のもとに一括して記載され、旧誌名からは参照で導かれている点で、注意が必要です。これらは、他機関への紹介状発行や文献複写依頼の際、大活躍のツールです。

●**国立国会図書館所蔵雑誌目録** まず国会図書館に的をしぼるなら、これが便利です。和文・欧文編の2分冊構成ですが、和文編には中国語・朝鮮語誌は含まれず、配列も誌名の50音順（ただし、ローマ字誌名はアルファベット順で別に配列）です。最新版の収録範囲は、和文1983年現在、欧文1984年現在の雑誌・紀要類。新聞を除く日刊・週刊・旬刊・半月刊・月刊・隔月刊・季刊等の刊行物も含まれます。

——以上、いずれも雑誌の所蔵館探しの基本的なツールを紹介しました。（雑誌係 中野里美）

## 雑誌文庫目録や文献目録は 雑誌記事の宝庫だ。

●大宅壯一文庫雑誌記事 「雑誌は資料索引総目録(全13巻)の宝庫」といった評論家故大宅壯一。彼の遺した雑誌17万冊(学術的でない一般誌——週刊朝日など)、書籍3万冊という膨大な蔵書と“大宅式分類法”と呼ばれる索引カードをもとに大宅壯一文庫は創立されました。この目録は、同文庫が現在所蔵する雑誌約6,500種類24万冊のうち、明治から1984年末までのおよそ2,000種に掲載された記事の索引です。人名編(48,180人分)と件名編(6,346項目)をあわせて約80万件の雑誌記事を載せています。人名編は日本・外国・架空の人物についての情報を、その人名の50音順に整理(著者索引ではない)し、また件名編は“大宅式分類法”により、大・中・小項目に分類され『件名総索引』とあわせて検索できるのが特色です。「奇人変人」といったユニークな件名もあり面白い記事も探せます。

●多彩な文献目録 ある特定のテーマについて、その関係雑誌記事を調べるために、専門分野別の文献目録を利用するのもよいでしょう。たとえば、国文学関係では『国文学年鑑』(1963-)。毎年発表される国文学の研究文献を、雑誌紀要論文目録と単行本解説とに分けて収録しています。論文目録は、時代ごとにさらにジャンル別に掲載されています。日本の現代作家・作品論に関する記事は、作家名別に関係雑誌論文などが集められている『日本文学研究文献要覧 現代日本文学編』が参考になります。ドイツ・フランス文学の作家・作品論については、それぞれ『ドイツ文学研究文献要覧』『フランス文学研究文献要覧』を利用して雑誌記事が探せます。法律関係では『最高裁判所図書館邦文法律雑誌記事索引』(1957-)があります。同館で収集した和雑誌のうち法律関係の記事を採録したものです。また月刊誌『法律判例文献情報』(1981-)は、毎月刊行される図書・研究紀要・雑誌論文などのうち、法律関係の文献を載せ、毎年末に年間索引(事項・著者名索引など)がつきます。このほかの分野にも多彩な文献目録があります。(和書係 小林邦子)

## 書物の風景——(11)

学習院の同級生だった武者小路実篤・志賀直哉・正親町公和・木下利玄の4人は、明治40年に「十四日会」なる勉強会を結成し、回覧雑誌『望野』を出していたが、明治43年4月、後輩の里見淳・園池公致らの回覧雑誌『麦』と柳宗悦・郡虎彦の回覧雑誌『桃園』とを合併し、新たな文芸誌を創刊することになった。これが、『白樺』である。この『白樺』には、有島武郎・長与善郎・岸田劉生らも、同人として加わった。

『白樺』は、永井荷風らの『三田文学』(明43・5創刊)や谷崎潤一郎らの『第2次・新思潮』(明43・9創刊)とともに大正文学の一つの核をなすもので、初めは反自然主義の立場から「個性の尊重・自己の確立」を唱えたが、後に人道的傾向が強まり、関東大震災を契機として廃刊(大12・8)されるまで160冊を刊行した。

### 雑誌 白樺

掲載された主な作品には武者小路実篤の『彼が30の時』(大3・10-11、大4・2)、『その妹』(大4・3、大5・12)、『或る青年の夢』(大5・3-11、大6・1)、志賀直哉の『網走まで』(明43・4)、『范の犯罪』(大2・10)、『城の崎にて』(大6・5)、有島武郎の『或る女のグリンプス(『或る女』の前編)』(明44・1-大2・3)などがある。また、ロダンの手紙を載せた「ロダン号」(明43・11)をはじめ、ゴッホやセザンヌ、ルノアールなどの西洋美術の紹介にも力を入れ、文学誌と同時に美術誌としての性格を持っていたのである。なお当館では、全冊を貴重書として保存している。

(和書係 北村 誠)



長期にわたって刊行を続けていた全集物数点が、最近、あいついで完結した。『陸羯南全集』（全10巻 みすず書房）=18年、『中国古典新書』（全100巻 明德出版社）=18年、『民俗民芸双書』（全100巻 岩崎美術社）=20年——などである。『中国古典新書』では、全巻が完結するまでの間に、執筆者の4分の1が故人になったとか、『民俗民芸双書』では、親子2代の執筆者が出たとか、長い「時の流れ」を物語るエピソードには、事欠かない。

しかし、これらの中でも最大の話題は、『法律学全集』（全60巻 有斐閣）の完結であろう。昭和32年、有斐閣の創業80年を記念して刊行を開始した『法律学全集』は、鈴木竹雄『手法形小切手法』を第1回配本とし、60年7月刊の加

藤一郎『農業法』を最終回配本として、28年にわたる刊行を終えた。戦後の法体系定着のため、学界をあげて取り組んだ同全集完結の意義は大きく、その成果を、最大限評価するに決してやぶさかではない。だが、当初3年で完結の予定が、28年もの歳月を要し、刊行が大幅に遅延したことに対する責任、とくに、全巻予約購読者に対する責任は免れないであろう。

執筆者の一人である三ヶ月章氏が語っているように、「法律学は常に現在とタイアップしていかなければならない学問」（座談会「法律学全集全60巻完結を記念して」書齋の窓、1985・10）である。にもかかわらず、28年間一度も本格的な改訂をしないまま版を重ねているものもある。今後は、これらの改訂作業を至急に進めることが、全集完結を側面から支えた読者に対する責任ではなからうか。（受入係 種田昭平）

## えんたい愛好家のみなさんへ

毎日寒い日が続いていますが、みなさんお元気でしょうか？ いよいよ学年末試験が始まりますが、この頃になると、本のえんたい愛好家のみなさんが増えるのが、心配のタネです。一度やったらやめられないへきのように、返却日の延滞は、常習者が多いようです。「遅れても」「貸出停止になるだけ」と、段々深みにはまって行くのでしょうか。毎朝9時前後に送る、「督促」と称する“モーニング・コール”を通じて、実に様々な性格が発見できます。そこで督促するさいの私の個人的原則を披瀝しますと、①本人以外の方が電話口に出た時は、返却をていねいに依頼する、②本人の単純な忘却や内心の罪悪感が明るく表現されている時は、こちらも努めて明るく対応する、③確信犯であるか身勝手な独占欲に満たされていることが明らかな時は、低い声でドスをきかせる等々…。いずれにしても、「延滞者にはきびしく！」が図書館の大原則です。どうか“道”をふみはずさないように。（運用係 中山高二）

### お知らせ

#### ○図書館も試験期体制へ

年が明けると、学年末試験の季節です。図書館にとって一番忙しいのもこの時期。しかも利用者は特定の資料に集中しがちです。それだけに必要な本は早く借りるのがコツ。そして期限がきたら次の利用者にゆずるのがマナー。

#### ○コピー利用もゆずり合い精神で

コピー・サービスも混雑が予想されます。独占せず、お互いにゆずり合いましょう。図書館でコピーできるのは“本学所蔵の図書・雑誌”のみで、ノート・レポートの類はできません。また、両替のサービスはしていませんので小銭は各自で用意してください。

来ぶらり No.12 1986年1月1日発行

発行責任者：波多野里望

編集委員：種田昭平 中山高二

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221